

自然食品業界は今……

自然で健康によい安全な食べものを、ここ数年、チエルノブイリ原産事故や、農薬、食品添加物問題などが指摘され、自然食品へのニーズが一層高まりをみせている。消費者層も従来の一部の愛好家から裾野を広げ、広く一般の消費者が利用するようになってきた。このため、生協はもとより、百貨店、スーパーなどの取扱いも目立つようになると、業界を囲む環境は変化をみせている。一方、健康自然食品の業界にもこの新しい時代への対応を進める動きが目立っている。連載で、小売、卸、製造の各企業の動きを紹介するが、今回から小売編をスタートする。

「健康で安全といった食べ物に対する消費者のニーズは一般的なものになったのではないのでしょうか。それだけに我々、自然食品を提供する側の、明確なポリシーや姿勢というものが、これからは問われます」

東京・恵比寿にある自然食品店「にんじん屋」(東京都渋谷区、谷区、谷区、谷区)の店主田耕邦子さんはいう。田耕さんは、同店を

経営するからわら、二年前から

ら「TAC21」を設立した。自然食品の卸をするためだ。

この会社の取扱い商品のコンセプトは「地球と人にやさしく安全で本物」。このため、無添加食品、サプリメント、ハーブなどの独自の商品をつ

け出し、「TAC21」ならではの商品が二百品目に。卸先は、現在、西武や伊勢丹などの百貨店、酒屋、米屋など都内近郊四十カ所。卸業務としては

け出し、「TAC21」ならではの商品が二百品目に。卸先は、現在、西武や伊勢丹などの百貨店、酒屋、米屋など都内近郊四十カ所。卸業務としては

ここ二、三年の同店の売上は毎年倍増。

「小売店のあり方として、今までのように問屋がもってきいたものを無条件で店に並べていくことが必要だという。時代は質の高い商品を求めています。商売も経営も、ど

小売店はポリシーを持って

小売店編

自然食の店「にんじん屋」

順調な伸びとなっている。

一方、こうした独自の商品の商品を品揃えした「にんじん屋」の商品を求めて全国行脚する



▲店内には独自の商品がズラリと並ぶ

あり、業界全体も五里霧中の状態だった。例えば、有機野菜にしても、行政的な基準や表示の仕方と

「こうなっていると信頼関係だけが支えです。あそこの店のものなら、あの産地のものなら大丈夫。といった信頼がないと自然食は伸びない。提供する側の「こだわり」は不可欠です」と田耕さん。

平成元年、農水省は「有機農業対策室」を設置。この三月にも、「食品表示対策室」を設置した。「自然」や「有機」など表示問題もいざれ検討されることになりそう。

「行政は、我々の後を追うのではなくむしろ、積極的に国民をリードしてもらいたいですね。国に対しても自然食品への「こだわり」を要求する。